基準植物図鑑（1996）があり，これらを利用すれば，韓国の植物の同定は容易である．ただこれら総てが韓国語で記載されているので，類似した種類の区別は容易でない．日本の図鑑でも同じだからおおきなことは言えないが，せめて重要な特徴は英語を併記してくれると，外国の利用者には便利になるのだが．

（山崎 敬）

□李 冠儀（編）：**台湾水生植物図誌** 378 pp．2001．行政院農業委員会．100台北市中正区南海路37号．1,000台湾ドル．

楊 遠波，顔 聖紘を中心とした22人の執筆者によって記載されたもので，シダ類以上の維管束植物で，水生するもの約三百十数種が収録されている．それぞれの科での属や種の索引，種類の記載や成育状態，主な種類の図があり，後の頁に成育場所や種のカラー写真が載せられ，学名以外は総て中国語で記載されている．日本やアメリカで出されている水生植物誌とほぼ同じ体裁であり，その台湾版といえる．

（山崎 敬）

□Noshiro S. and Rajbhandari K. R. (eds.): **Himalayan Botany in the Twentieth and Twenty-first Centuries** 212 pp. 2002. Academia, Tokyo. ¥9,600.

東京大学の原 寛教授がネパールのDepartment of Plant Resourcesと協同して，ヒマラヤの植物調査を始めてから40周年を記念するシンポジウムが，2001年5月にカトマンズで開催され，私は当初からの生き残りとして参加した．本書はその記録である．東京大学のヒマラヤ植物調査は，初期段階の，募金・すべての用品の日本での調達・船荷・カルカッタでの通関・ネパールへの輸入という経済的物理的障壁の克服に時間と労力を費やす時代に始まり，両国の発展，両機関の協力関係の緊密化，ネパールにおける観光産業の発達，交通手段の進歩などのおかげで，今日では現場への往復については，大した負担を感じることなく実現できるようになった。原 寛教授の後は，金井弘夫，大橋広好，大場秀章と引きつがれてきたが，大場氏の時代になって質的転換をとげ，それ迄のフロラ把握のための広範大量の標本採集から，参加者がそれぞれのテーマを持って調査研究を行う様態に進化した．また大場氏が主唱してFlora of Nepal Projectが，国際協同研究事業として発足している．

Part 1は古参メンバーによる回顧とH. OhbaおよびK.R.Rajbhandariによる歴史的回顧と将来への展望が，多数の文献や地図の引用を伴って述べられている．Part 2では，現役メンバーそれぞれの研究テーマによる成果が示され，これ迄の資料蓄積の上に立って，フロラのみならず，モノグラフ，組織，生理，遺伝，文献学など，多様なトピックが披露されている．Part 3は調査に同行したネパール人研究者が，それぞれの異文化体験を語っている．本書の冒頭にある私の回顧談も，逆の意味での異文化体験なのだが，日本側主催の調査旅行とネパール側主導のそれとでは，日々に起こるトラブルの中身が全然違うということは，本書の性格上書けなかった．

ネパールでは，不安定な政情を支えてきた王権の衰退による政治機構の変化が，研究体制にも当然のことに影響を及ぼしていることが，いくつかの文の端々に暗示的に記されている．このシンポジウムのわずか一週間後に起こった王室内部の激変と，最近のいわゆる「マオイスト」による地域騒乱は，今後の研究の発展に大きな影響を与えるであろう．日ネ両国の善意ある研究者の努力によって，これらの困難を克服して研究が進展し，あわせてFlora of Nepalの順調な成果蓄積に期待したい．

本書はアカデミア書店（Tel. 03-3813-9805, Fax. 03-3812-8509）で扱っている．なお本誌76巻6号で紹介したK.R.Rajbhandari: A Bibliography of the Plant Science of Nepal, Suppl. 1とそのCDも，同書店で入手できる．

（金井弘夫）